



聖歌写本との出会い

西脇 純

旅は、ときに忘れ得ぬ出会いを体験させてくれる。スイスのザンクト・ガレン修道院で出会った1冊の古写本のことをお話しさせていただきたい。

もう20年以上も前のことになる。1988年、ベルリンの壁崩壊の1年前、当時学生だった私は1年間ドイツに滞在する機会を与えられ、西ドイツの首都ボンに近い神言会の神学校でお世話になりながら、ボンの語学学校に通っていた。渡独して間もなく、南山大学の当時の神学科で教えておられたノイマン神父が一時帰国でドイツに来られた。日本でも野鳥の会に入っていたほど自然愛好家の彼は、風光明媚なボーデン湖とそこに浮かぶライヒェンウ島、そしてザンクト・ガレン修道院へと回る旅に、私をさそってくださった。

ザンクト・ガレン修道院は7世紀のアイルランド人修道士ガルスが拓いた僧坊に端を発し、その後ヨーロッパ有数のベネディクト会修道院にまで発展した。18世紀の壮麗な大聖堂が残っており、1983年にはユネスコの世界遺産にも登録されている。修道院の名を世界中に知らしめているのは、付属図書館所蔵の写本群である。現存する最古の修道院設計図面 (Cod. Sang. 1092)、純粋なテキストを伝える最古のベネディクト会則写本 (Cod. Sang. 914) などは特に有名である。

学部生の頃からグレゴリオ聖歌に興味を持ち、聖歌隊で歌う機会もあった私は、ザンクト・ガレンを訪れるならぜひ、「カントトリウム」と呼ばれる10世紀初頭のグレゴリオ聖歌写本 (Cod. Sang. 359) を見てみたいとノイマン神父に話していた。ミサの独唱者 (カントール) のための聖歌を収めるネウマ譜付き聖歌集としては最も古い、大変貴重な写本である。

修道院図書館の展示室に公開中の写本は、みな素晴らしいものばかりだった。だが、そこには「カントトリウム」はなかった。でもせっかく来たのだ。実物と会うことができたなら…。

そんな一学生の淡い期待に応えるべく一世一代の大芝居に打って出てくださったのが、ノイマン神父である。彼は躊躇する私を図書館の事務室に連れてゆき、あろうことか私のことを職員に「日本のグレゴリオ聖歌界において最も将来を嘱望される気鋭の研究者である」と紹介してしまったのだ。ただしこれは後で神父に聞いてわかったことである。当時の私には彼が喧嘩腰に何かをまくしたてているようにしかみえなかった。

通常このような貴重な写本は信頼のおける研究機関なり研究者からの紹介状がなければ閲覧は不可である。ところが私たちの場合、これも後でわかったことであるが、館長がお昼休みで外に出ていたことが幸いした。ノイマン師の気迫に押されたらしい職員は、私たちを事務室奥の一室に案内してくれ、しばらくすると、本当にあの「カントトリウム」が運ばれてきたのである。私はもう嬉しくて夢中でカメラのシャッターを切っていた。そんな私を「急いで！」とせかしながら、ノイマン神父は素手で写本のページを押さえてくれた。

ものの5分も経たないうちに巨人が現れた。昼休みから戻った館長である。世にも恐ろしいしかめっつら。私たちが直ちに図書館からつまみ出されたことはいまでもない。さいわいカメラとフィルムは無事だった。そのときに撮った数枚の写真は、今でも私の大切な宝ものである。

ザンクト・ガレンの写本群は、現在デジタル化が進行中で、「カントトリウム」はすでにインターネットで公開済である。縁あって再びグレゴリオ聖歌を学ぶことになった私は、コンピューター画面に映しだされる「カントトリウム」を見るたび、ノイマン師との愉快的旅と、この写本 (http://de.wikipedia.org/wiki/Codex_Sangallensis_359, <http://www.cesg.unifr.ch/en/index.htm>) との思わぬ出会いを懐かしく思い出す。そして、画面越しにはあるが、この聖歌写本との語らいを、ひととき楽しんでいる。

(NISHIWAKI, Jun : 人文学部准教授)

レオナルド・フジタの生涯 —美と信仰の融合—

坂倉 直美、栗山 義久

はじめに

レオナルド・フジタ¹⁾ (藤田嗣治) が81年の生涯を閉じて40年経った。それを記念して2008年7月から1年をかけ全国5都市(札幌、宇都宮、東京、福岡、仙台)で「没後40年レオナルド・フジタ展」²⁾ が盛大に開催された。今回の展覧会企画の目玉は、6年の歳月をかけて修復が行われた幻の大作4点、晩年を過ごしたエソンヌ県の住まい、それと最後の作品である「平和の聖母礼拝堂」に描かれたフレスコ画であろう。

フジタについては、おかつ頭に黒ぶち眼鏡という独特な風貌と乳白色の裸婦の絵をどこかで目にしたかなというぐらいの印象しか持っていなかったが、初めて生で彼の作品を目の当たりにし、作品が放つオーラに圧倒され、強い衝撃を受けた。館内に展示されたフジタの年表から彼の波乱に満ちた生涯を知り、作品一つ一つに深く引き込まれていった。ここではフジタの81年間の歩みを辿り、画家を目指して単身渡仏したエネルギー、日本画壇から受けた評価、最晩年にフランス国籍を取得しキリスト教に改宗したことなど、日本ではあまり知られていない彼の生涯について紹介したい。

第1章 フジタの誕生～パリ留学 (1886～1912) 0歳～26歳

1. 生い立ち

1886(明治19)年、東京府牛込区つくあきに生まれた。父親嗣章は房州長尾藩本田家の家系を継ぐ軍医で、森鷗外の後任として軍医の最高職である陸軍軍医総監を務めた。武官としての海外経験が豊富だった父の影響か、藤田家は明治の時代には珍しく自由な雰囲気にあふれていた。母親政まさは旧幕臣・小栗信(幕末の傑物、小栗上野介の分家にあたる)の娘で、フジタが4歳のときに34歳の若さで亡くなった。

兄弟には、長姉喜久、次姉康子、兄嗣雄がいた。4人兄弟の末っ子でまわりから可愛がられ育てられたが、母を亡くしてからは9歳年上の喜久が母親代わりを務めた。フジタは生涯に5人の女性と連れ添ったが、幼くして母を亡くした寂しい経験がそうさせたのだろうか。

フジタを取り巻く家系図を見ると、多くの軍医、数々の著名な芸術家の名が連なっている。母方祖父にあたる小栗信には娘が3人おり、長女じゅん鏞は小山内健(陸軍軍医)と結婚、薫(小山内薫・新劇界の先駆者)と八千代(岡田八千代・女流劇作家で洋画家岡田三郎助の妻)を生んだ。次女政は藤田嗣章と結婚、喜久、康子(夫は軍医)、嗣雄(法制学者・元上智大学教授で妻は陸軍大將児玉源太郎の三女)、嗣治の4人の子をもうけた。このうち喜久は軍医の蘆原信之と結婚し、敏信(蘆原英了・音楽・舞踊評論家)と義信(建築家)ほか6人の子をもうけた。二人の著名なおじを持つ蘆原英了は『僕の二人のおじさん、藤田嗣治と小山内薫』のなかで、「小山内薫も藤田嗣治も結局、小栗家から才能を得たということになる。……(中略)小栗信の長女、次女からそれぞれすぐれた才能をだしているのだから」と語っている。

2. 画家になる夢

フジタは幼いころから絵を描くことが大好きだった。本格的に画家になる夢を持ち始めたのは、小学校6年生のとき。図画はいつも級中一番だった。中学生になり、パリで開催された万国博覧会にフジタの水彩画が代表作品のひとつとして出展された。これは大きな自信になったようだ。中学2年生のとき、ついに父親に画家になりたいの思いを手紙で伝えた。画家志望など受け入れ難い時代で、父親は常日頃からフジタを医者にしたいと考えていたが、このとき、何も言わずその志を認め、画材購入費として50円(当時の小学校教員初任給が8円)を手渡した。フジタはさっそく神田の文房堂へ走り、画材一式を買いそろえた。フランスへの留学を夢見てフランス語を勉強し始めたのもこの頃である。

1905(明治38)年、19歳で東京高等師範付属中学を卒業、すぐにでもフランスへ留学し、本格的に絵の勉強を

1) Leonald Foujita フジタ自身は、レオナルドではなくレオナルドと発音している(夏堀全弘『藤田嗣治芸術試論』)が、ここではレオナルドで統一した。

2) 現在、関連企画として「レオナルド・フジタ展 —よみがえる幻の壁画たち」が、全国4会場で巡回し開催されている。

始めようとしたが、ひとまず東京美術学校西洋画科（現在の東京芸術大学）に入学することになった。ここでフジタは黒田清輝のもとで勉強するが、黒田から学ぶ絵画はフジタを満足させるものではなかった。フジタが卒業制作に描いた自画像は師である黒田が嫌う黒をふんだんに使ったものだった。絵の中のフジタは、師に挑むような強烈な視線を投げかけ、そこからは何か成し遂げようとする強い意志が伝わってくる。フジタは生涯で数多くの自画像を描いているが、これほど鋭い表情のものはない。心の葛藤を鋭く表現したフジタらしい作品であるが、黒田は学生たちの前でこの絵を悪い絵の見本として紹介した。この出来事は、ますますフジタをフランスへと駆り立てた。

画像は本誌に掲載

『自画像』(卒業制作) 1910年
東京芸術大学蔵

第2章 パリでのフジタの活動（1913～1937）27歳～51歳

1. フランスパリへ

1910（明治43）年、東京美術学校を卒業、精力的に創作活動を続けたが、黒田清輝を中心とする文展（文部省美術展覧会）に3年連続落選した。この鬱屈した時期、鴛田登美子と出会い、大恋愛の末1912（明治45）年結婚した。しかし、わずか1年後の6月、登美子を日本に残したまま単身フランスへ旅立つ。当初の計画では、フジタが一足先に出発し、1年ほど経て生活が落ち着いたころ登美子呼びよせようというものであったが、第一次世界大戦の勃発により登美子の渡仏は実現せず、他の事情も重なり、再会することなく1916年離婚した。フジタは実に筆まめで、フランスに向けて出発した船の中から、約3年間、離れて暮らす登美子に宛てて200通を超える手紙を送っている。そこには、この時代の日本人男性には珍しいほどのまっすぐな愛情表現、西洋文化にじかに触れた感動、一流の画家たち（モディリアーニ、ピカソ、パスキン、ルソー、キスリングなど）との出会い、など日々のささいな出来事から芸術観にいたるまで詳しく書かれていた。

パリに着いて間もなく、フジタはモンパルナスで暮らし始めた。ピカソのアトリエでルソーが描いた「詩人・アポリネールの肖像」を目にし、大きな衝撃を受ける。自由な表現、そしてそれを高く評価するピカソ。フジタがどうしてもなじめなかった黒田清輝流の画法がパリではもはや時代遅れで古臭く、フジタが描こうとしていた自由な画法が始まろうとしていた。

「私が今まで美術学校で習っていた絵などというものは実にある一、二人の限られた画風だけのものであって、絵画というものはともかく自由なものだ。」（藤田嗣治著『腕一本 フラ 巴里の横顔』）

2. 下積み時代を経てパリの寵児へ

1914（大正3）年、第一次世界大戦が始まり、日本からの送金も途絶え、生活はかなり困窮した。生涯の中で一番貧乏な時代であった。戦火が激しくなっても、フジタはパリに留まり、ひたすら絵を描く。パリで成功し世界有数の画家になることだけを考える毎日であった。結局は1年間ロンドンに疎開しただけで、ほとんどをパリで過ごした。その間、のちの「乳白色の裸婦」のモデルとなるキキ³⁾と出会った。ある日、キキが高熱を出して寝込んだときのこと、薬を買うお金も食べ物を買うお金も持っていないキキに、なんとかお金を工面し、医者と呼んで治してやった。フジタのやさしい一面がうかがえる。このことがきっかけとなり、キキをモデルにいくつもの作品を描くようになり、フジタは画家として脚光を浴びるようになった。フジタにとってキキは貧しい時代をともに乗り切った仲間の一人であった。

1917（大正6）年、第一次世界大戦の終わりが近づいたころ、フランス人モデルのフェルナンド・バレエと二度目の結婚をした。フジタより年長のフェルナンドはフジタの生活を支えるとともに、彼の画家としての才能を信じた。フェルナンドの協力を得、このころから絵を描くことで少しずつ収入が得られるようになった。1919（大正8）年、サロン・ドートヌヌ⁴⁾に出品した6点がすべて入選した。

3) キキ：本名はアリス・ブラン(1901～53年)ブルゴーニュの田舎町に貧しい私生児として生まれた。12歳の時、パリに出てどん底の生活を経験するが、キスリングのモデルを務めたことから一躍有名になり、華やかなモンパルナスで画家たちのお気に入りのモデルとして一世を風靡した。完璧な美人ではなかったが、性格の良さや無邪気さが画家たちを魅了した。キスリングを始め、フジタ、スーチン、ピカソ、ドラン等、エコール・ド・パリの画家たちがこぞって彼女をモデルに使い、また写真家で愛人のマン・レイは彼女の写真を多数撮影し、写真を今世紀最大の芸術まで高めるのに貢献した。

4) 1903年に設立され、今でも毎年秋にパリ市内にて開催。近代美術史上、大きな実績を残したサロンである。モディリアーニ、セザンヌ、ピカソ、ルノワール、ミロ、ユトリロ、などが活躍した。日本人では、フジタのほか、佐伯祐三、ヒロヤマガタ、小山敬三などがある。

さらに、2年後のサロン・ドートンヌに出品した3点もすべて入選した。『自画像』、『寝室の裸婦キキ』、『私の部屋、目覚まし時計のある静物』である。『寝室の裸婦キキ』（パリ市立近代美術館蔵）は縦1.3m、横1.95mの大作で、横たわる裸婦の白い肌はまるで陶磁器のような透明感で「乳白色の肌」と絶賛された。絵の前には連日この「乳白色の肌」を一目見ようと大勢の人たちが集まった。すぐに8,000フラン（絵で生活できるようになったころの1ヶ月の収入は450フラン）の高値がつき、フジタはまたたく間にパリの寵児となった。日本を発って8年目のことである。



『私の部屋、目覚まし時計のある静物』1921年
（フランス国立近代美術館蔵）

3. 日本での評価

1920年代に入り、フジタの絵はパリで非常に高い評価を得るようになっていたが、一方、日本での評価は全く違った。それを表す出来事として、「物の細部を描くきめ細かなタッチはフジタならではの」とパリで高い評価を得た『私の部屋、目覚まし時計のある静物』を晴れやかな思いで日本の帝展⁵⁾に出品しようとしたときのこと、帝展の審査員は、フジタが日本ではまだ無名との理由で一般審査と同じ扱いをした。これに対し、父嗣章の猛抗議の結果、無審査で出品はできたものの、作品への反響はほとんどなく、美術評論家もあまり興味を示さなかった。フジタにとってこの絵は自身でも「私の生活を表した最も大事な作品」と語るほど思い入れが深く、パリでも戦時中の日本でもこの絵をずっと持ち歩いた。終戦後の混乱の中で日本を離れるとき、おそらくもう二度と戻らない祖国に残す遺品のつもりで、帝室美術館（現東京国立博物館）に寄贈を申し入れたが、拒否された。結局この絵は1951年にフランス国立近代美術館に寄贈された。これら一連の出来事は、パリでフジタほどの成功を収めることができなかった、帝展の中心となって活躍していた画家たちの嫉妬により流された噂によるものと推測される。この後、永久に日

本を去ることになる1949（昭和24）年まで、フジタは日本画壇の冷淡さにどうしようもない悔しい思いを持ち続けることになる。

4. 16年ぶりの帰国

1929（昭和4）年、新しい妻（3番目）ユキ⁶⁾を伴い、16年ぶりに帰国した。老いた父に親孝行がしたいというのが帰国の理由の一つだった。日本滞在中は、朝日新聞社主催の展覧会、日本橋三越で開かれた個展、第十回帝展への出品、母校である東京美術学校での講演、随想集の執筆と、超多忙な日々であった。帝展を除くすべてから熱狂的な支持を受け、パリ画壇の寵児として熱烈な歓迎を受けたが、日本の美術界だけはフジタに対しほとんど反応を示さず、冷やかな視線を投げかけるだけであった。父親とくつろいだひと時を過ごし心の安らぎを得たフジタは、3ヶ月の滞在を終え、日本には二度と戻らないという決意を胸に、再びパリへ帰って行った。

1930年の夏、7年間連れ添ったユキと別れ、今度は赤毛の踊り子マドレーヌ・ルクーと暮らし始めた。フジタはもともとアトリエで制作するのを好む画家であったが、1930年からマドレーヌを伴い、北米、南米の各地を転々と移動し、自身の絵に新たな画風を取り込もうと挑戦した。1933年、アメリカから再び日本に戻ると、個展を開催し、出品した作品77点すべてを完売した。わずか3年前、二度と戻らないと決めたはずの日本にフジタはなぜ戻ってきたのか。推測ではあるが、3年間何かを求めるような彷徨の日々を過ごすことでフジタの中に変化がおり、安息の地としてパリではなく生を受けた日本を選んだのかもしれない。今度こそその思いで。この時、フジタ47歳であった。

5. 新しい生活

1936年6月、6年ほど一緒に暮らしたマドレーヌが、異国の地日本で、コカイン中毒のため急死。フジタは再び一人になったが、年末には、銀座の料亭に勤める24歳年下の堀内君代と5度目の結婚をした。蘆原英了は、『僕のおじさん、藤田嗣治と小山内薫』のなかで、このときのことをこう記している。

「私の新しい叔母は純粋な人だった。だからフジタをひたむきに愛し、フジタの愛を疑ったりした。私は初めのうちは例によってフジタはそのうちに逃げ出すのではないかと思ったりしたこともあったが、段々にこれはい

5) 帝国美術院展覧会、日本美術展覧会(日展)の前身。黒田清輝の尽力で結成された。

6) ユキ：本名はリュシー・バドゥ（1903～64?年）リュシーという名を嫌ったため、フジタがユキ（日本語でバラ色の雪を意味した）と名付けた。もう一人の乳白色の裸婦のモデルである。

つもと様子が違う……（中略）、この夫婦生活は一方の死まで続くだろうと確信するに至ったものである。」

君代夫人との幸せな生活がスタートし、平穏な日々もつかのま、日中戦争、その後、第二次世界大戦が勃発し、またもや時代の渦に巻き込まれることになった。

第3章 第二次世界大戦とフジタ（1938～1948）52歳～62歳

1. 戦争画を描く

1939（昭和14）年9月、第二次世界大戦が勃発、フジタはこの日、日記にこう記している。

「私ほど戦争に縁のある男はいない。1913年にパリに来て1年目に欧州大戦争にぶつかり、日本へ帰れば日支事変にあい、5月にパリに来て、この9月にはまた戦争に出くわしてまるで戦争を背負って歩いている男だと、W君に言われて成る程そうだと自分で思った。」

翌年、パリ陥落直前の5月、戦火を逃れ、夫人とともに三度目の帰国をした。このときフジタは27年間のオカッパ頭を切り、坊主頭になっていた。日本画壇では、すでに200人を超える画家によって戦争画制作が盛んに行われており、美術展も開催されていた。現在東京国立近代美術館に収蔵されている『哈爾哈河畔之戦闘』をきっかけに、フジタは何かを思い定めたかのように戦争画にのめり込んでいった。代表的な作品としてフジタ自らが傑作と呼ぶ『アッツ島玉砕』（東京国立近代美術館蔵）がある。縦1.93m、横2.59mの大キャンパスに描かれたこの作品では、死闘を繰り広げる何十人もの兵士たちの折り重なる肢体を描いている。そして絵の中央下部にはよく見ないとわからないほどの小さな野の花が兵士たちの魂を慰めるかのように咲いている。フジタの絵は戦争を鼓舞するものではなく、ひとりひとりの兵士たちの生きた証しの記録のように思える。フジタが戦争画を描いたのは、52歳から59歳のわずか7年であったが、このことがこのあとのフジタの運命を大きく変えることになった。

2. 日本脱出～再びフランスへ

1945年8月15日、フジタは疎開先で天皇の玉音放送を聞き、敗戦の事実を知った。その直後、画家仲間たちは急によそよそしくなり、フジタから距離を置くようになった。のちに君代夫人がこのときのことを次のように追想している。

「フジタと親しくしていると自分もアメリカ軍から追及を受けると邪推しているのではないか」

日本美術会等から半ば生贄に近い形で戦争協力の罪を非難された彼は、日本脱出を決意する。1949年、渡仏の許可が下りないなか、フジタは「絵描きは絵だけ描いてください。仲間げんかをしないでください。日本画壇は早く世界的水準になってください」との言葉を残してアメリカへ旅立った。

第4章 フジタの晩年とランスの「平和の聖母礼拝堂」（1949～1968）63歳～81歳

1. フランス国籍取得から、カトリックへ改宗

ニューヨークでは、念願の絵の制作に没頭する日々を送り、戦後の代表作で知られる『カフェ』（フランス国立近代美術館蔵）を制作している。しかし、新天地のアメリカでも戦争画の影響で煙たがられ、孤独感をつのらせる一方だったのか、1年足らずで栄光のパリへ旅発つ。されど、もはやフランスも1920年代の「エコール・ド・パリ」のパリではなかった。多くの知人が去ったパリで創作に没頭する。

そして1955（昭和30）年、君代夫人とともにフランス国籍を取得（日本国籍抹消）し、4年後の1959年、ランス大聖堂で洗礼を受ける。以後、敬愛するレオナルド・ダ・ヴィンチにちなんでレオナルド・フジタと名乗ることになる。

彼をフランスへ向かわせたのは、戦争協力者として日本画壇の羨望を交えた非難中傷が背景にあったことは確かだが、なぜ日本を捨てカトリックへ改宗したのだろうか。

日本への絶望が西洋への同化へと向かわせたのか、心の安定を得ようとする魂の衝動なのか、キリスト教美術を通しての美学の到達点なのか。本人にしか知り得ないことだが、どれも真実かも知れない⁷⁾。日本でもフランスでも異邦人でしかあり得なかったフジタのこの選択については、晩年の集大成とも言える礼拝堂の壁画制作から、その真意を探ってみよう。

2. 「平和の聖母礼拝堂」の制作

1961年、パリ郊外の静かな農村ヴィリエール・パークルに転居する。古い農家をアトリエとして、人に会うのを避け、子供たちや聖母マリアの絵を描き続ける。（「世の中を捨てたのではない。遠ざかっただけのことだ。」1967年記述 藤田嗣治直話『藤田嗣治芸術試論』）

7) 「平和の聖母礼拝堂」のパンフレットには、「フジタはランスのバジリック・サン・レミで「神の啓示」を受け、その神秘体験によって仏教徒からカトリック教徒に改宗するにいたった」と説明されている。

1965年、79歳のフジタはそこで人生最後の仕事にとりかかろうとしていた。それは自らの手で礼拝堂をつくり、その内部をフレスコ画で飾ろうという計画だった。前年、南仏ニースで見たマチスの礼拝堂（84歳で亡くなったマチスは死の3年前に礼拝堂を完成させ、そのそばに葬られている）が深く心に焼きついていたのであろうか。

「日本に生まれて祖国に愛されず、又フランスに帰化してもフランス人としても待遇も受けず、共産党のように擁護もなく、迷路の中に一生を終る薄命画家だった。お寺を作るのは私の命の生根の試しをやって見るつもりだ。」（「夢の中に生きる」1966年4月18日『腕一本 巴里の横顔』）

礼拝堂の内部を飾る絵として選んだのはフレスコ画だった。フレスコ画は、漆喰が乾くまでに仕上げなければならないため、正確で素早い筆使いが要求される難しい技法で、体力も要求される。それでも中世の聖堂を飾る

フレスコ画を選んだのは、レオナルド・ダ・ヴィンチを目指したフジタの美学（人生）の到達点とも言えよう。

1966年6月、夫婦で洗礼を受けたシャンパーニュ地方の中心都市ランスに礼拝堂の建築が完了し、いよいよフレスコ画の制作にとりかかった。80歳のフジタにとって、文字通り骨身を削る3ヶ月間の作業を経て、最後の仕事となった「平和の聖母礼拝堂」（ノートル＝ダム・ド・ラ・ベ）と名付けられた礼拝堂は遂に完成した。

内部へ入ると、その四方の壁面には全面にフレスコ画が描かれている。祭壇正面には、平和への祈りを捧げる幼な児キリストと聖母マリア、入口の扉上部には「磔刑図」、右手の小祭壇には「最後の晩餐」、

左手の小聖堂には「葡萄の聖母」と「七つの大罪」、そして左右の壁には「病者の癒し」、「受胎告知」、「奇跡の漁」、「弟子の足を洗うキリスト」、「降誕」、「十字架の道」、「復活」のキリストの生涯の場面が描かれている。

彼が自らの最後の制作にあたって、なぜ聖堂の設計から装飾モチーフの細部に至るまで、すべて自らの手で行わなければ気がすまなくなったのだろうか。「私の命の生根の試し」として最後に挑んだ中世美術（特に中世の聖堂装飾）とはそもそもどんなものなのだろうか。

現在の絵画や彫像などが作品として見られ、芸術として独立したのは近代以降のことであり、もともと聖堂は生活の空間から離れて宗教的な体験を導く場であった。そこでは今で言う美術作品（建築、祭壇、壁画、彫像、ステンドグラスなど）一つ一つが一体となって、キリストやマリアと向かい合う、受難の苦しみや悲しみを共有し、祈りをささげる宗教的な場を形成していた。中世美術は、それぞれが独立した額縁に収められた絵画とは異なり、感覚を超越した観念の領域を直感的に把握させて全体を成立させる創造活動であった。そしてそれこそが中世の寺院やダ・ヴィンチに驚愕したフジタの最終目標となったのだろう。

なお、「平和の聖母礼拝堂」で気付かされるのは、キリストの生涯の場面が時系列に並んでいないことである⁸⁾。ここでは、壁画はキリストの生涯を説明するために配置されたのではなく、堂内

画像は本誌に掲載

礼拝堂祭壇上に描かれた「聖母子」のフレスコ壁画 写真提供：北海道新聞社

画像は本誌に掲載

礼拝堂入口扉上部「磔刑」のフレスコ壁画 写真提供：北海道新聞社

8) 昨年紹介されたテレビ番組「美の巨人たち」（2008年12月27日放映）においても指摘されている。

の建築空間と一体化したイメージを喚起させる場面構成こそが、フジタの目指した創作表現とみるべきだろう。聖堂入口上部と正面祭壇の壁画は、当然この聖堂の中心テーマである⁹⁾。ところが、今回の展覧会で展示されている聖堂模型の内側をよく見ると、略画ながら祭壇正面はキリスト磔刑図、聖堂入口上部には聖母子像と実際とは逆に描かれている。構想が現実化していく中で、フジタの内部に心理的な変化が起きたのだろうか。壁画の差し替えから、重心が「キリストの贖い」¹⁰⁾から「聖母の慈しみ」へと変化していったと見做すのは速断過ぎるかも知れないが、キリストの生涯と自分を見つめ直した結果の「贖罪」と「永遠の慈愛」こそが彼の回心の核心であったことは疑い得ない。その証しに、平和の聖母が祝福し、庇護している女性達の中に君代夫人を、磔刑図の祈る群衆の中にフジタ自身の姿が小さく描かれている。

フレスコ画が完成した4ヶ月後、10月に除幕式を行う。精根尽き果てたのか、12月入院、君代夫人が見守るなか、1968年1月29日チューリッヒで逝去、81歳だった。この終点符となった礼拝堂の小祭壇（「最後の晩餐」）の下に、彼の望みどおり埋葬された。

おわりに

ここまで栄光と挫折を繰り返した異邦人フジタの生涯を辿ってきた。フジタの繊細で剛毅な性格と非凡な感受性が、多くの誤解・中傷を呼び、ついには日本を捨てさせたのは間違いなく事実だろう。フランス国籍取得・カトリック改宗も彼独特の処世術と見做す者もいる。しかし、栄光のエコール・ド・パリを失い、ひたすら創作に没頭した彼の美学的到達点とは「善」の精神（献身・信愛・帰依）と美（中世キリスト教美術）の融合であり、最晩年に到達した境地が礼拝堂の制作に結晶したと言えるのではないだろうか。

「私がローマン・カトリックに改宗したのは、この宗教の善と美こそ普遍的なものであると思われたからである。」（高嶋雄一郎「藤田嗣治とLeonard Fujitaのはざままで」『福音と世界』61（7）2006.7）

2009年4月2日、フジタが逝って41年目の春、君代夫人が静かに98歳の生涯を閉じた。夫人は生前フジタとともに日本から受けた誹謗中傷のためか、かたくなな姿勢を貫いていた。しかし、NHKテレビディレクター近藤史人氏の2年余りの交渉の末、ようやく面会が許可され、交渉開始から9年を経てNHKスペシャル「空白の自伝・藤田嗣治」（1999年9月23日放映）が実現した。この番組で初めてフジタの人と作品の全貌が明らかになった。

晩年、フジタの誤解を解くために君代夫人は想い出の一つ一つを語り続けた。その最後の仕事を終え、今、「平和の聖母礼拝堂」にフジタと並んで静かに眠っている。



ランスのシャペル・ノートル＝ダム・ド・ラ＝ペ（平和の聖母礼拝堂）外観 写真提供：北海道新聞社

9) 左右の小祭壇（「葡萄の聖母」「最後の晩餐」）の配置と合わせて上から見ると、十字架を形成している。
10) 「この礼拝堂は私が八十年の罪を償うために造ったのだ。」（湯原かの子『藤田嗣治 パリからの恋文』）

【参考文献】

- 『藤田嗣治画集』(東京朝日新聞社、1929)
 キキ『モンパルナスのkiki』河盛好蔵訳(美術公論社、1980)
 近藤史人『藤田嗣治「異邦人」の生涯』(講談社、2002)
 『藤田嗣治書簡—妻とみ宛て—』「パリ留学初期の藤田嗣治」研究会(2003)
 夏堀全弘『藤田嗣治芸術試論』(美術の図書三好企画、2004)
 藤田嗣治『腕一本 巴里の横顔:藤田嗣治エッセイ選』近藤史人編(講談社、2005)
 湯原かの子『藤田嗣治—パリからの恋文』(新潮社、2006)
 蘆原英了『僕の二人のおじさん、藤田嗣治と小山内薫』(新宿書房、2007)
 林洋子『藤田嗣治作品をひらく:旅・手仕事・日本』(名古屋大学出版会、2008)
 『没後40年 レオナルド・フジタ展』(北海道新聞社、© 2008)
 『レオナルド・フジタ展—よみがえる幻の壁画たち』(北海道新聞社、© 2009)
 「ランスにフジタを訪ねる・レオナルド・フジタの礼拝堂—名作ギャラリー—」鈴木進(みづゑ)(744) pp.4-7, 1966/12
 「藤田嗣治—その愛の履歴」徳大寺公英(文芸春秋)46(4) pp.236-244 1968/4
 「追悼・藤田嗣治」陰里鉄郎編(みづゑ)(759) pp.1-30 1968/4
 「藤田嗣治「日本脱出」の手紙」朝日見(芸術新潮)25(2), pp.82-88, 1974/2
 「日本の美術界にひと言」藤田君代(芸術新潮)26(5) pp.78-79 1975/5
 「レオナルド・フジタの「芸」—生誕100年記念「レオナルド・フジタ展」を機に(アート・ニューズ特集)」瀬木慎一(芸術新潮)37(12), pp.50-65, 1986/12
 「NHKスペシャル 空白の自伝 藤田嗣治」の撮影(第39回(1999年度)日本テレビ技術賞受賞技術報告) 藤田浩久(映画テレビ技術)574 pp.51-53 2000/6
 「藤田嗣治のキリスト教帰依をめぐる」湯原かの子(国際経営・文化研究)7(2), pp.53-3, 2003/3
 「祖国に捨てられた天才画家(大特集 鮮やかな「昭和人」50人—ゆかり深き人々の証言 この見事な生き方を見よ)」藤田君代(文芸春秋)84(3) pp.262-264 2006/2
 「特集 藤田嗣治の真実」清水敏男(芸術新潮)57(4), (676) pp.14-82, 2006/4
 「フジタと日本がすれ違った長い時間」近藤史人, 「故郷喪失者の「子供たち」(特集 藤田嗣治)—(異邦人、未来へ帰還せり)」松井みどり, 「人生か、作品—藤田の足跡をたずねながら考えたことなど(特集 藤田嗣治)—(異邦人、未来へ帰還せり)」田中功起, 「パリ留学初期の藤田嗣治—妻とみ宛書簡から(特集 藤田嗣治)—(若き藤田嗣治の肖像)」加藤時男(ユリイカ)38(5) (519) 2006/5
 「パリ派、戦争画、宗教画の変遷をたどる—「生誕120年 藤田嗣治展」考察(特集 フジタとモーツァルト)」糸井恵(世界週報)87(25), (4251) pp.24-27, 2006/7/4
 「藤田嗣治と Leonard Fujita のはざままで」高嶋雄一郎(福音と世界)61(7), pp.39-44, 2006/7
 「特集」狂騒のパリの巨星。時代に翻弄された孤高の画家 藤田嗣治(レオナルド・フジタ)の素顔(サライ)20(3), (460) pp.17-44 2008/2/7
 「アン・ル・ディベルデル インタビュー」, 「群像表現への憧憬」林 洋子(SPECIAL FEATURE LEONARD FOUJITA—藤田の眼差の変遷をたどる), (美術手帳)60(912), pp.107-121, 2008/9
 『NHKスペシャル 空白の自伝・藤田嗣治』日本放送協会(1999/9/23放映)
 『美の巨人たち レオナルド・フジタ作「平和の聖母礼拝堂」』テレビ東京(2008/12/27放映)

*掲載の絵図: © ADAGP, Paris & SPDA Tokyo, 2009

(SAKAKURA, Naomi; KURIYAMA, Yoshihisa :図書館事務課)

資料寄贈者等(前号以降~2009.10まで)

「カトリック文庫」充実のため、下記の方々より貴重な資料を寄贈していただきました。ここにお名前を掲載させていただきます、改めて謝意を表したいと存じます。

【個人】DUNPHY, Walter氏、丹羽 民子氏

本学図書館では、わが国におけるカトリックの歴史・文化・活動に関する資料を収集しております。

皆様から資料の寄贈を賜りたくお願い申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信
 カトリコス No.24 2009.11.1発行
<http://www.nanzan-u.ac.jp/TOSHOKAN/>
 発行: 南山大学図書館
 カトリック文庫委員会
 編集委員: 岩間潤子、坂倉直美
 〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
 Phone: 052(832)3707/Fax: 052(833)6986
 *図書館Webページでもご覧いただけます。